

成人教育の社会学
— パワー・アート・ライフコース —

はしがき

「成人教育の社会学」、いつの頃からか、この書名をもつ研究を世にだしたと思うようになった。それから、だいぶときが過ぎたが、ここにやっと上程することができる。

なぜ、「成人教育の社会学」なのか。成人教育あるいは社会教育の研究領域では、あまりその拠って立つ学問的立場を明示する研究者は多くない。いわば領域学として存立してきたとあってよい。成人教育あるいは社会教育研究は哲学、心理学、行政学、社会学など多様なアプローチが可能であり、かつ、その学問的立場を明確にしつつ競い合い、補い合う方がより創造的な研究の展開も可能なはずである。

「私の立場は社会学である」、折にふれてこう主張するようになったが、では、そもそも社会的アプローチとはどのようなものなのか。この学的立場に立つことにより、これまでの研究をいかにブレイクスルーできるのか、これらの諸点を明確に示し得ていなかった。

この書でどこまで明確にしえたのかは本書を読んでいただくしかないが、この書でわたくしが強調したかった点は、以下の3点に集約できる。

第1に、教育実践の意味を学習者の立場から描くことである。この点、本書では「社会教育の研究では、学習者中心といいながらも、実践の分析は研究者やファシリテーターの視点から語られる」(77頁)と述べている。欧米の博物館教育研究を見ると、研究の中心には学習者理解が置かれるべきであるという、研究の焦点が明確である。学習者が何を学んでいるのか、いかに学んでいるのか、これらの解明が職員たちの実践にも重要な意味をもつからでもある。研究者は、学習者の学びのプロセスの解明を通して、教育実践に寄

与することができるはずである。

第2に、この点は研究者の拠って立つ学習論の立場と密接に関連する。日本でも学習論の解明を志向する研究が一つの潮流をつくってきたが、この学習論の理解が不十分なために、ただ「ふり返り」を強調するだけの議論にとどまっているのではないか。これに対して、各章に違いはあるものの、本書では構成主義的学習論の認識論的立場から実証的研究を重ねてきているところに特徴がある。

第3に、教育学的研究、実践における社会的価値の重要性をくり返し主張してきた。教育における「技術者モデル」を批判しつつ、以下のように述べている。

教育という行為は、単なる技術的な過程ではなく、その行為をめぐる価値の問題がつねに厳しく問われるべき実践である。しかも、教育による諸個人の社会的成長を通して未来の社会をつくる「投機」としての性格をもつ。ある所定の目的を前提とした教育実践を効率よく遂行することに視野が限られるとすれば、それは、現在の支配や社会構造を維持し、正統化することにだけつながることになる（13頁）。

本書は、研究科長の職にある中で出版を準備してきた。その意味でも思いで深い本となる。任期中に教育学研究科の改組に取り組んできたが、新しいカリキュラムでもっとも重視したのが、この教育をめぐる価値や倫理を学ぶ（省察する）ことの重要性である。この価値や倫理を「エデュフェア・マインド」として理解した。

やや長いが引用しておきたい。

現代社会は、政治・経済・社会のグローバル化や、人びとの価値観・アイデンティティの多様化、高度情報化などによって特徴づけられる。その反面、排外主義や孤立主義が台頭し、異質性・多様性を許容しない人々の増加や情報格差が課題として指摘されている。

こうした社会状況では、あらゆる人々が潜在能力を発揮・伸長できる機会が与えられ、それぞれの異質性・多様性が尊重される環境づくりが必要となる。具体的には、貧困家庭や、障がい者、外国人、民族的・性的マイノリティなどの人々が排除されることなく公平に扱われ、社会の一員として活躍できる環境づくりであり、このことに主体的に関わる自覚と力量の形成を、次世代への働きかけを通じてだけでなく、すべての世代の継続的な学びを通じて行うことが求められる。

我々は、こうした人びとへの深い共感にもとづき、教育学研究や教育的実践をとおして彼らの社会参画を支援し、一人ひとりの人間としての可能性を最大限に発揮できる力を育むこと、それをとおして公正で包摂的な社会 (a fair and inclusive society) をつくろうとする倫理観をもつことを「エデュフェア・マインド」と定義する。

よい教育とは何か。このもつとも基本的な「問い」が多くの研究で欠けているのではないか。そもそも、教育という営みは、研究においても実践においても、すぐれて価値志向的な性格をもつ。しかも、それは一つの正解があるというものではない。だからこそ、つねに教育の目的の妥当性を批判的に吟味することが、「わたくしたち」(個人が理論的に構想するのではなく、協同でつくるものである) には求められる。その基盤となるのが、エデュフェア・マインドである。

最後に、本書の構成を示しておこう。第1部は、「成人教育のポリティックス」である。ここでは、成人教育の実践及び政策に働くパワーに焦点をあてつつ論じている。第1章「『パワー』と成人教育」では、成人教育の場に作用する闘争と交渉というパワーの問題を理論的に論じる。第2章「『労働の場の学習』とパワー」は、パワーの視点から学習する組織論や組織的学習論を批判的に検討し、成人教育研究の課題と視点を提示する。つづく第3章「若者の社会参加のポリティックス」では、青年・若者政策における「参加論」をめぐる「言説」を検討し、その視点の転換をとらえる。これにもとづきあるべき参加論を提示する。

第2部「アート教育と意味構成」では、ミュージカル、ワークショップ、美術館教育を対象に学びのプロセスをミクロに分析する。学習のプロセス解明は、成人教育研究の中心的課題であるが、従来の研究では十分検討がなされてこなかった。この点に焦点をあてた論文から構成される。第4章「震災とアート教育の可能性」では、ミュージカルの実践を事例に、学びのプロセスの解明を通して、省察的学習論を批判し、ホリスティックな学習の意義を主張する。第5章「ワークショップへの参加と自己変容のプロセス」では、ワークショップ内でおきる意識変容のプロセスを解明し、インフォーマル・エデュケーションとしての身体を通した学びのプロセス及びその意義を明らかにする。第6章「美術館経験と意味構成」では、来館者たちが、どのような「解釈戦略」を通して作品を鑑賞するのか。この相互作用を通していかなる意味を構成するのかを解明している。

第3部「女性のライフコースとエンパワーメント」は、3つの章から構成される。第7章「健康学習とおとなのエンパワーメント」は、医療生協の保健委員活動に参加した女性のライフコースと、この学びのなかでの健康づくりの主体としての成長を描く。第8章「エンパワーメントを支える学びの構造」では、エンパワーメントを図ることのできる学びの構造とはどのようなものなのかを論じている。つづく、第9章「社会変革と中国女性のライフコース」は、文化大革命を経験し、「革命」の終息とともに大学進学を果たしたコーホートの女性たちを対象に、彼女たちが文化大革命をどのように経験し、大学入学への道をいかに主体的に切り拓いてきたのか、を記述する。

第4部「社会的包摂と成人教育の可能性」は、モンゴルの体制転換のなかで社会的に排除された人びとの運命を詳細に描きながら、彼・彼女たちを社会的に包摂するうえで成人教育がどのような役割を果たしてきたのか、いかなる可能性をもつのかを解明する。第10章「体制転換と社会的排除のプロセス」は、体制転換後、人びとがいかなるプロセスを経て零落していくのか、その排除のプロセスをゲル集落の調査を通して明らかにする。最後に、第11章「社会的包摂と成人教育の可能性」では、コミュニティ・ラーニングセンター (CLC)、教育生産センターの事業の意義を参加者たちへのヒアリ

ングを通して明らかにしている。

まだ論じるべき課題は少なくない。しかし、研究の領域及び分析の手法など、これまでになく新しい地平を示すことができたのではないかと思う。

成人教育の社会学 — パワー・アート・ライフコース

目次

| | |
|--|-----------|
| はしがき | i |
| 序章 成人教育の社会学に向けて..... | 3 |
| はじめに | 3 |
| 1 国家介入と社会教育・生涯学習政策..... | 4 |
| 2 経済と教育のポリティックス — OECD とユネスコとの対立と協調... | 5 |
| 3 学習の時代 — 「教育」と「学習」のポリティックス..... | 10 |
| 4 評価の時代 — エビデンスにもとづく教育実践 | 12 |
| 5 成人教育の社会学 | 13 |
| 6 本書の構成 | 15 |
| 第1部 成人教育のポリティックス | 19 |
| 第1章 「パワー」と成人学習 | 20 |
| はじめに | 20 |
| 1 「パワー」と成人教育研究 | 22 |
| 2 交渉と闘争としての成人教育 | 26 |
| 3 「パワー」と状況的学習論 | 31 |
| おわりに | 34 |
| 第2章 「労働の場の学習」とパワー | 39 |
| はじめに | 39 |
| 1 なぜ、「労働の場の学習」研究なのか | 39 |
| 2 「学習する組織」論の幻想 | 45 |
| おわりに | 51 |
| 第3章 若者の社会参加のポリティックス | 54 |
| はじめに — 参加論の両義性 | 54 |
| 1 社会参加をどうとらえるべきか — 参加論の基本視点 | 55 |
| 2 子ども・若者の社会参加政策 | 59 |
| 3 若者と生涯学習政策 | 66 |
| おわりに — 社会参加をどうつくるのか | 70 |

| | |
|---|-----|
| 第2部 アート教育と意味構成 | 75 |
| 第4章 震災とアート教育の可能性 — ホリスティックな学びの意義 — ... | 76 |
| はじめに — 希望をつくるミュージカル..... | 76 |
| 1 「ありがとう」を伝えるプロジェクト | 77 |
| 2 ミュージカルの力 — 協同のプロジェクトへの参加 | 81 |
| 3 被災者の意識・行動の変容 | 88 |
| おわりに — ホリスティックな学びの意義..... | 91 |
| 第5章 ワークショップへの参加と自己変容のプロセス | 94 |
| はじめに — 研究の課題 | 94 |
| 1 ワークショップの学び | 95 |
| 2 研究の対象と方法 | 96 |
| 3 分析結果 | 98 |
| おわりに — ワークショップにおける学びの意義..... | 115 |
| 第6章 美術館経験と意味構成 | 121 |
| はじめに | 121 |
| 1 調査と分析の方法 | 122 |
| 2 見学者の解釈戦略 | 123 |
| 3 「鳥獣花木屏風図」の解釈戦略 | 132 |
| 4 震災からの復興と美術館経験 | 136 |
| 5 美術館教育への示唆 | 142 |
| 第3部 女性のライフコースとエンパワーメント | 147 |
| 第7章 健康学習とおとなのエンパワーメント | |
| — 医療生協保健委員の活動を通して — | 148 |
| はじめに — 課題の設定 | 148 |
| 1 医療生協について | 150 |
| 2 庄内医療生協における学習構造..... | 152 |
| 3 組合員によるヘルスプロモーション参画の可能性 | 155 |
| おわりに — 健康学習とエンパワーメント..... | 163 |
| 第8章 エンパワーメントを支える学びの構造 | 167 |
| はじめに | 167 |
| 1 教育実践の目的とは何か — 民主主義を学ぶ..... | 168 |
| 2 社会学級の歴史と制度 | 170 |
| 3 社会学級の学びの構造とエンパワーメント | 175 |
| おわりに — 社会学級の現代的意味 | 187 |

| | |
|---------------------------|-----|
| 第9章 社会変革と中国女性のライフコース | 190 |
| はじめに | 190 |
| 1 文化大革命と大学をめぐる状況 | 193 |
| 2 文化大革命による運命 — 反革命・走資派の烙印 | 197 |
| 3 文化大革命と学校 | 206 |
| 4 文化大革命の終焉 — 大連外国語大学への道 | 215 |
| おわりに | 229 |

| | |
|--|------------|
| 第4部 社会的包摂と成人教育の可能性 — 排除から社会的承認へ | 235 |
|--|------------|

| | |
|---------------------------------|-----|
| 第10章 体制転換と社会的排除のプロセス | |
| — ホギーン・ツェグ：絶望の淵からの報告 — | 236 |
| はじめに — 研究の課題 | 236 |
| 1 見捨てられた地域と人びと | 237 |
| 2 世帯構成と世帯の特長 | 248 |
| 3 体制転換と零落のプロセス | 255 |
| 4 地位身分の喪失と不安定な居住 | 263 |
| 5 劣悪な労働、不安定な就業 | 270 |
| 6 極限の生活と外部からの支援 | 275 |
| おわりに — 成人教育への示唆 | 287 |
| 第11章 社会的包摂と成人教育の可能性 | 289 |
| はじめに | 289 |
| 1 モンゴルにおけるノンフォーマル教育の概要 | 290 |
| 2 バヤンズルフ区のCLCの活動 | 292 |
| 3 ハンウール区教育生産センターの活動 | 304 |
| 4 学習者のライフコースとエンパワーメント — 学ぶことの意味 | 312 |
| おわりに | 316 |

あとがき 319

執筆者一覧 321

索引 322

編著者紹介

高橋 満 (たかはし みつる)

1954年 茨城県生まれ

専門領域：成人教育研究、生涯学習研究

新潟大学法文学部卒業

東北大学大学院教育学研究科博士課程後期単位取得退学

教育学博士（北海道大学）

東北大学大学院教育学研究科 教授

[主な著書]

『コミュニティワークの教育的実践 — 教育と福祉とを結ぶ』2013年、東信堂

『NPOの公共性と生涯学習のガバナンス』2009年、東信堂

『ドイツ福祉国家の変容と成人継続教育』2004年、創風社

『社会教育の現代的実践 — 学びをつくるコラボレーション』2003年、創風社

『地主支配と農民運動の社会学』2003年、御茶の水書房

成人教育の社会学 — パワー・アート・ライフコース

2017年9月10日 初版第1刷発行

[検印省略]

定価はカバーに表示してあります。

編著者©高橋 満／発行者 下田勝司

印刷・製本／中央精版印刷

東京都文京区向丘 1-20-6 郵便振替 00110-6-37828

〒113-0023 TEL (03)3818-5521 FAX (03)3818-5514

発行所
株式会社 東信堂

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan

E-mail : tk203444@fsinet.or.jp <http://www.toshindo-pub.com>

ISBN978-4-7989-1394-0 C3037 ©TAKAHASHI Mitsuru